



コロナ禍においても労働者協同組合法制化が着実に進んだ5月でした。

協同組合振興研究議員連盟の総会で確認された各党の担当者による担当者会において、各団体や個人から寄せられた意見に真摯に向きあい、意見のすり合わせが行われ、法案がまとまっていく。法案づくりがこれほど丁寧で、寄せられたすべての意見に耳を傾け、作られていくものだとは想像もせず、国会議員の役割と大変さの一端を目の当たりにした。ここから提出まで更なる苦労があるとはこの時はまだわからず、その経過は次号に譲る。

5月には緊急事態宣言も解除され、この間止まっていた労協連への相談も、また始まる。

「デジタルプラットフォームのようなワーカーズコープは作れないか」「資本に頼らない必要な記事を配信できるメディア協同組合は作れないか」「後継者がいない企業の従業員によるワーカーズコープを作れないか」など、法制化の情報も少しずつ広がるなかで、このような相談が寄せられ、今後さらに増えていくことが予想される。

またすぐに仕事おこしとはいかないが、コロナ禍において、子ども食堂を支援したいと、ロータリークラブからの寄付の依頼

や、生協やフードバンクからの食料の提供、さらには家や畑を提供したいなどの連絡も入る。各現場ではいまこそ困窮家庭や子どもたちを支える活動をしたいと、子ども食堂に変えてフードパントリーと呼ばれる食料やお弁当の提供を行う取り組みもはじまった。協同労働は、やはり一人ひとりの想いや、目の前の困難から始まることを改めて感じる。

労協連加盟組織の総会も5月末に全国各地で行われた。ワーカーズコープちば、労協ながの、はんしんワーカーズコープの議案では、フードバンク・フードパントリー、子ども食堂、クリーンキラーエースの寄付、商店街活性化など、社会連帯活動が組合員主導で活発に行われていることが報告されている。これらの取り組みは組合員だけではできず、地域の方々との繋がりがなくしてできず、その地域との繋がりや目の前の課題を自らが解決する経験が、新たな仕事おこしに繋がっていく。特にちばやながのでは、2年以上にわたる赤字を、組合員が主体となって現場のよい仕事の取り組みの積み重ねから経営改善を実現している。今後、この間培ったよい仕事の話し合いから、新たな仕事おこしに繋げることができるか、真価が問われる。